戦間期ドイツの保守革命論における社会主義
——シュペングラーとゾンバルトの場合——

柚　木　寛　幸

1　はじめに

戦間期ドイツの保守革命論とは，第一次大戦の敗北とヴィルヘルム体制の瓦解によって，極度の不安定状態に陥ったヴァイマル期（およびナチス初期）のドイツ社会にあって，その社会危機の克服と新たな社会統合の構築を模索した一群の保守系知識人たちの思潮のことを指す。この保守革命論の一つの特徴として指摘できるのは，それが，保守主義的（ナショナリズム的）側面と革命主義的（社会主義的）側面という一見，相反するような二つの側面を持ち合わせていたこと，したがってそれが，従来（第一次大戦以前まで）の左右のイデオロギー的枠組みには必ずしもおさまりきれないものだったということである。そして保守革命論のこの特徴があらわれているのは，既存の資本主義体制の存続が拒否され，それに代わるべきものとしてドイツ型社会主義が提唱された点である[1]。K. ゾントハイマーは，ヴァイマル期の「青年ナショナリズム」（保守革命論）に概して見られた「国民的な社会主義」（Sontheimer 1968=1976 : 281）について，マルクス主義を引き合いに出しつつ，次のように指摘している[2]。

> 青年ナショナリズムはとりわけそれが反ブルジョア的心情をもち資本主義経済体制を拒否するという点で，ドイツ国権派の伝統的ナショナリズムから区別される。……青年ナショナリズムには，本来の動機からみてマルクス主義的社会主義にごく近いような，反資本主義的・反ブルジョア的な基本線が確認される。（Sontheimer 1968=1976 : 281）

本稿では，戦間期ドイツの保守革命論の二人の代表的論者の社会主義論を取り上げ，考察してみる。すなわち，O. シュペングラーと W. ゾンバルトのそ

れである。これからこの二人の社会主義論をそれぞれ見ていくにあたっては，主に以下の点に着目することになるだろう。第一に，彼らが自らの社会主義構想を提示することになるのも，そもそも彼らにどのような歴史的危機意識があってのことだったのか（またそこには，同時代の西欧マルクス主義とのどのような類似性を指摘できるのか）という点である。第二に，その危機意識の下，彼らがマルクス主義をどのように解釈し，批判することにもなるのかという点である。第三に，彼らがマルクス主義に代わるべきものとして立ち上げた社会主義構想とは，どのようなものだったのかという点である。

2　シュペングラーのプロイセン社会主義

①　貨幣の独裁

O. シュペングラー（1880-1936）といえば，いうまでもなく，第一次世界大戦後（第一巻は1918年，第二巻は1922年）に出版され，そのタイトルに象徴された文化ペシミズム的議論ゆえに当時のドイツやそのほかのヨーロッパ諸国で衝撃をもって迎えられた『西洋の没落』の著者である。この書の中で，近代資本主義社会における「貨幣の独裁」（Spengler 1922=2001 : 391）という事態について論じられている箇所がある。ここで彼は，貨幣の独裁（近代資本主義）の一つの契機が，農村経済から都市経済への移行（ないし，経済活動の主要な担い手が，農民から商人へと交代したこと）にあると考えている。その際，彼は，農村経済と都市経済の違いについて，次のように述べている。

> 農民にとっては交換に際して場合々々に生ずる一時的な，感ぜられた自己と関連ある価値があるだけである。かれが使用せず，または所有しようと思わないものは，かれにとっては「なんの価値もない」。純然たる都市人の経済において初めて客観的な価値と各種の価値とがあり，それらが思考の要素としてかれの個人的必要から独立して存在し，そうして理念的に一般妥当的となっているのである。……初期の人間が財を〔質的に〕比較し，そうして理性だけで〔合理主義的に〕比較するのではないのに反して，後期の人間は商品の価値を計算し，しかも固定した質のない尺度で〔量的に〕計算する。（Spengler 1922=2001 : 396）

つまり，ここでシュペングラーがいわんとしていることをマルクス主義的にいえば使用価値から交換価値への変化，あるいはG. ルカーチでいうところの物象化[3]ということになるだろう。したがって貨幣の独裁という事態をめぐってのシュペングラーの時代認識と危機意識には，マルクス主義，とくに同時代の西欧マルクス主義との類似性が，まずは指摘できるというわけである。にもかかわらず，後に見るように，シュペングラーは，貨幣の独裁という事態の克服を志すにあたって，マルクス主義との対決姿勢をあらわにすることにもなる。

ではここからは，マルクス主義批判も含めたシュペングラーの社会主義論を検証するために，彼が1919年に提出した『プロイセン主義と社会主義』を考察していきたい。この書で彼は，イギリス型の自由主義（資本主義）はもちろんのこと，さらにはマルクス主義からも区別する形で，プロイセン社会主義という自らの社会主義構想を提示することになる。まずは，シュペングラーによるイギリス自由主義批判から見ておこう。

②　イギリス自由主義批判

シュペングラーによると，イギリスは，「万人の万人に対する自由闘争」を前提としつつ，「独立した立場をとり，自分の責任さえ負えばそれでよいとする私的個人という類型をつくりだした」。その上でイギリスは，「権力は個人が所有するものである」とした（Spengler（1919）1933=1992：21）。こうして「イギリスは国家を自由なる私的個人の概念に置き換えた」（Spengler（1919）1933=1992：40）。だがこの概念から派生する「私的自由とは商業的自由であり，国家を道具として取り扱う私的政治にならざるをえない[4]」（Spengler（1919）1933=1992：66）。

このようにシュペングラーは，イギリス自由主義が反国家主義的な個人主義に依拠したものであることを指摘する。だがこの特性は，個々人に経済的利益の追求を奨励するような「イギリス資本主義倫理」（Spengler（1919）1933=1992：48），そうした自由放任型・夜警国家型の経済主義（自由競争原理）となってあらわれることにもなると，シュペングラーは見る。それゆえに彼は，こうしたイギリス自由主義がドイツには決して適さないものだとする。というのもシュペングラーが考えるに，イギリス自由主義とは逆に，プロイセン社会主義が依拠すべきは，政治主義的な全体主義（国家主義）にほかならなかったからであ

る。この点については，後にあらためて見ることにする。

③　マルクス主義批判

それでは次に，シュペングラーによるマルクス主義批判を見てみよう。マルクス主義をシュペングラーが問題視するのも，ひとえに，マルクスの唯物史観（経済史観）がイギリス自由主義の上述の思考枠組み（経済主義と個人主義）に組み込まれたままだという点にある。つまり，「マルクスは国家不在の歴史，即ち諸政党〔階級諸党派〕の闘争の場として，また経済上の対立として歴史を考察する」のだが，マルクスのこの唯物史観は，「イギリスの歴史観」をなぞったものにすぎないと，シュペングラーはいう[5]（Spengler（1919）1933=1992：84）。

シュペングラーが考えるに，世界史上の対立軸は，ドイツ的な社会主義（全体主義，政治主義）とイギリス的な資本主義（個人主義，経済主義）との間に本来，見出されるべきはずのものである。しかしマルクスの場合，社会主義というドイツ的概念をプロレタリア階級に，また資本主義というイギリス的概念をブルジョア階級に置き換え，この両階級間の対立軸にすりかえてしまった。だが階級とは，純粋な経済概念であり，すなわちイギリス的概念にすぎない（Spengler（1919）1933=1992：74-75）。だから「マルクスは資本から個人的利益に対する権利を取り除こうとするが，それを個人的利益に対する労働者の権利に置き換えることしかできない」。しかしこれでは，「社会主義ではなく，まさにイギリス主義である」。換言するなら，「マルクス主義は労働者の資本主義である」。ゆえにマルクスの「思想的創造力は私的商人社会を私的労働者社会にひっくりかえすためのものでしかない」（Spengler（1919）1933=1992：80）。

つまりシュペングラーは，マルクス主義の主眼が，被搾取階級としてのプロレタリアートの経済的救済（その個々人の生活水準の向上）ということに置かれており，したがってマルクス主義の唯物史観や階級闘争史観は，イギリス的資本主義を支える原理，すなわち経済主義と個人主義にいぜん拘束されたままだという見解を示す。そこでシュペングラーは，マルクス主義がイギリス的資本主義の転覆をいくら目指そうとも，結局それは，次のことしか意味しないと考える。すなわち，資本主義の担い手の交代とその延命ということである。こうしてシュペングラーは，「ドイツ社会主義をマルクスから解放する」（Spengler（1919）1933=1992：10）という使命を掲げることになる。

ところで，ここでいちおう注意しておくなら，シュペングラーのこのマルクス主義批判は，同時代のドイツにおけるマルクス主義の修正主義的傾向，すなわち社会民主主義を主に念頭に置いてのことだろう[6]。しかし，マルクス自身に対するとなると決して適切でないことはいうまでもない[7]。

④　プロイセン社会主義とは？

ここまで，シュペングラーによるイギリス自由主義とマルクス主義に対する批判を見てきた。その際，シュペングラーが問題視したのは，端的にいうと，それらが個人主義と経済主義に基づいているという点にある。ということはつまり，シュペングラーが理想とするプロイセン社会主義とは，それら二つの原理とは反対のもの，すなわち全体主義と政治主義（または国家主義）に依拠したものだということになるだろう。このことも含め，シュペングラーのいうプロイセン社会主義とはいかなる風に構想されていたのかについて，ここからは考察していくことにする。まずは，プロイセン社会主義の全体主義性について，シュペングラーがどのように論じているのかから見てみよう。

シュペングラーによると，「全体が権力を所有するのは，ドイツ人の，厳密に言うとプロイセン人の本能であった」（Spengler（1919）1933=1992：22）。だからドイツでは，「個人は全体に捧げなければならない」のであり，また，「広義における精神的自由，自由意志における服従，即ち服従による自由をもって万人が万人のために奉仕」しなければならない（Spengler（1919）1933=1992：38-39）。

> 個人を一全体につなぎ合わせる言葉にならない意識こそ，われわれ〔ドイツ人〕の最も神聖かつ深遠なるものであり，厳しく数百年の歳月を経て培われた，どの民族よりも傑出した遺産なのである。（Spengler（1919）1933=1992：11）

このようにプロイセン社会主義では個人ではなくあくまで全体が重要視されると，シュペングラーは考える。そこで彼のいうプロイセン社会主義は，国家主義的色彩を帯びることにもなる。このことは，政治的なものとしての国家と経済的なものとしての商業との間の世界史レベルでの対立図式をもって示され

る。

いまわれわれはドイツの運命のみならず，文明全体の運命をも危機にさらされていることを認識する。この運命はドイツのみならず，世界にとっても重要な問題であり，この問題は世界のためにドイツで解決されねばならない。即ち商業が国家を，あるいは国家が商業を未来において支配すべきなのであろうか，ということを。(Spengler (1919)1933=1992 : 101)

そこでプロイセン社会主義では，経済主義的観点の排除が目指されることになる。シュペングラーによると，「軍人精神と官僚精神の一つの核となるプロイセン主義はたんなる富裕，華美，安楽，享楽，『幸福』などということを終始一貫軽蔑する」(Spengler (1919)1933=1992 : 47)。つまり，「プロイセン国家」が「言葉の最も高い意味において真の国家である」ためには，各々の経済的利益を追求するような「私的個人」が国内に存在しないことが条件だと，シュペングラーは考える (Spengler (1919)1933=1992 : 65)。その一つの方策として彼が提示しているのは，現行の階級社会に代えて身分社会（位階制度）を復活させるということである[8]。

貧富〔階級〕の対立ではなく，能力によって与えられた位階〔身分〕が生を支配するということが社会主義である。これがわれわれの自由であり，個人の経済的恣意から解放された自由なのである。(Spengler (1919)1933=1992 : 102)

プロイセン社会主義の「目的は個人一人ひとりの豊かさにあるのではなく，全体の血にある」(Spengler (1919)1933=1992 : 53) と，シュペングラーはいう。そもそも彼は，「大衆民主性を根っから嫌い，貴族層の消滅を嘆い」ていた (Laqueur 1974=1980 : 112)。そうした彼からすれば，（前述の反個人主義的・反経済主義的観点とは矛盾するようでもあるが）私有財産制の堅持はむしろ，「孤高の『個性』に執着するかれの思想」の一つの生命線だった（八田 1986 : 181)。つまり，シュペングラーが社会主義について語る時，経済的平等（富の再配分）ということはさして考慮されておらず[9]，国家を基盤とした政治的統

合ということの方にあくまで関心が向けられていたというわけである。この点，ゾントハイマーは，次のように指摘している。

> こうしたドイツ的社会主義の理念[100]は，もともと経済的に定義されたものではなかった。そこでの重要問題は，生産手段を掌握する権力でも，また第一義的には社会的生産物の公平な分配でもなく，何よりも国民的統一であり，階級分裂の克服であり，階層的秩序をもつ国家機構への全国民の編成であった。(Sontheimer 1968=1976 : 287)

ところで，シュペングラーがプロイセン社会主義の政治主義的側面を説く際，「権力への意志」(Spengler (1919)1933=1992 : 48) というニーチェ流の概念が登場してくる。シュペングラーは，権力への意志というこの概念をもって，「個人の幸福ではなく全体をめぐる闘争」を志向しつつ，全体のために「高い責任」を負うことのできるような意志 (Spengler (1919)1933=1992 : 48) を想定している。そこで，「個人意志は全体意志に属するというのがプロイセンの特質である」(Spengler (1919)1933=1992 : 44) と，シュペングラーはいう。また彼は，「プロイセン社会主義国家」とは，(プロレタリア階級の生活状況や就労条件の改善とか，ブルジョア階級の不労所得の撤廃とかを道徳的観点より目指すマルクス主義とは異なり) 善悪の彼岸に位置すべきものである (Spengler (1919)1933=1992 : 80) とか，「戦争とは高度な人間生活の永遠の形態であり，また国家とは戦争のために存在するものである」(Spengler (1919)1933=1992 : 59) とも述べている。そして，プロイセン社会主義の樹立とは「権力への道」を意味している (Spengler (1919)1933=1992 : 102) と，シュペングラーはする。

つまり，シュペングラーにとって権力への意志とは，「世俗的な物質的利害に奉仕すべきではなく，義務や使命や犠牲といったもっと高尚な領域に奉仕すべき」(Herf 1984=1991 : 89) ことを意味していた。そしてこれが，彼の考えるところの政治的なものの内実だったともいえよう。

⑤ 小　括

近代資本主義下の貨幣の独裁という事態を問題視する点には，シュペングラーにはなるほど，マルクス主義，とくに同時代の西欧マルクス主義との類似性も

見られた。そこでシュペングラーは，イギリスの自由経済型資本主義に対抗するものとして，プロイセン社会主義を提唱することになる。だが，その際，彼が，イギリス自由主義を問題視したのも，その個人主義的・経済主義的（反国家主義的）性格ゆえにであり，例えば被搾取階級としてのプロレタリアートの解放といったマルクス主義的問題関心は希薄であった。そこでシュペングラーは，マルクス主義もまたイギリス自由主義的枠組みに組み込まれたままのものだと見なし，それとの徹底的な対決姿勢を示すことにもなる。そしてマルクス主義に代えてプロイセン社会主義を新たに掲げることでシュペングラーが目指したのは，「国家の権威によって保たれる民族秩序－個人が自己のエゴイスティックな利益追求を断念し，共同体に奉仕するような体制」（Sontheimer 1968=1976 : 286）を樹立するということである。つまり，社会主義を権威主義的なプロイセン主義と接合することで，国家を中核とした全体主義体制（身分秩序）を実現するということである[11]。そして，このプロイセン社会主義の実現をつうじて近代資本主義下での貨幣の独裁も克服できると，シュペングラーは考えていたといえよう。

3　ゾンバルトのドイツ社会主義

①　マルクス主義との決別

W. ゾンバルト（1863-1941）は，周知のように19世紀末から20世紀前半にドイツで活躍した保守系の著名な経済学者・社会学者なのだが，彼はもともとはマルクス主義的（社会民主主義的）立場から出発した（初期ゾンバルトのマルクス主義的立場からの代表作は，1896年の『社会主義と社会運動』である）[12]。しかし，若き頃の彼のこのマルクス主義的立場も，その後（20世紀に入って以降），失われていくことになる[13]。そして彼の反マルクス主義的立場が決定的となったのが，1924年の著作『プロレタリア社会主義』だったとされる（Sieferle 1995 : 99）。この書では，プロレタリア階級を主体としたマルクス主義的革命が否定されるとともに，民族主義を基盤とした社会主義が唱えられるようになる。

このようにゾンバルトは，マルクス主義的立場から出発するも，ヴァイマル期には保守革命論的立場に転じることで，マルクス主義に対峙することになる。

だが，彼の社会主義的（反資本主義的）立場そのものは，その形を変えることで，ある意味，晩年まで維持されることにもなる。それが，ゾンバルトのいうところのドイツ社会主義である。そこで以下においては，彼のこの保守革命論的な社会主義構想を検証するために，晩年の彼がそれを体系的に提示している1934年の著作『ドイツ社会主義』[14] を考察していくことにしたい。その際，まずは，彼がドイツ社会主義なるものを主張するにあたって，いかなる歴史的危機意識を抱いていたのかを見てみる。つづいて，その危機意識からして，マルクス主義（プロレタリア社会主義*）のいかなる点に彼が限界を指摘したのかを吟味する。その上で，彼のいうドイツ社会主義とはいかなるものだったのかを考察することになるだろう。

＊本稿で参照するゾンバルトの『ドイツ社会主義』の翻訳書（難波田春夫訳）では，“proletarisch”が＜プロレタリヤ＞（ex. der proletarische Sozialismus→プロレタリヤ社会主義）と訳されているのだが，本稿で同書から引用する際，この語の翻訳は，＜プロレタリア＞に変更している。同様に，＜ブルジョワ＞についても＜ブルジョア＞とすることにした。

②　経済時代

ゾンバルトは，19世紀から現代（1930年代前半）にいたるまでの時代を「経済時代」と称している[15]。その上で彼は，この時代の歴史的特性について，次のように述べている。

> この時代〔経済時代〕においては，経済が，経済的利益が，したがってまたこれに関連していわゆる『物質的』重要性が，他のあらゆる価値に対して優位を要求し，また獲得して，そのため経済のもつ特性が，他のすべての社会，文化の領域を特徴づけているのである。(Sombart 1934=1982 : 1)

このようにゾンバルトは，経済的価値（利害）がそのほかのあらゆる文化的・社会的諸価値を規定しているという点に，近現代（経済時代）の歴史的特性を見る。そして経済的価値の支配というこの事態に対する歴史的危機意識こそが，彼にドイツ社会主義を提唱させたものにほかならない。「私〔ゾンバルト〕がドイツ社会主義と呼ぶのは－否定的にいうならば－経済時代からの全面的転向以外の何ものでもない」(Sombart 1934=1982 : 52)。

ところでゾンバルトは，経済時代の歴史的進展には，次の三つの「発展系列」が指摘できるという。つまり，「精神化，物質化，平準化」(Sombart 1934=1982 : 21) である。彼によると，第一に精神化とは，「人間主体がいわゆる客観化された精神に規定されるようになり」，その結果，人間の「自発性，自由及び自己決定が除去せられることである」。換言するなら，「個人の判断や決意」に代わって「厳密に規定された規則，基準が個人の態度を制約し拘束する」ような事態である (Sombart 1934=1982 : 21-22)。第二に物質化とは，「機械化」などの結果，「人間が労働過程そのものから排除されること」を意味する。第三に平準化とは，「われわれの生活形式すべてが一様となり，単一化しようとする傾向である」(Sombart 1934=1982 : 24-25)。

ゾンバルトは，各々の過程をこのように説明した上で，「精神化，物質化，平準化は，経済が目的として設定されたことの結果であり，また誤って『合理化』と呼ばれているものの結果なのである」(Sombart 1934=1982: 26) と述べている[16]。ゾンバルトのこの発言にもあらわれているように，彼のこの議論は，一つには，M. ヴェーバーの合理化テーゼ（官僚制化論）を意識した上でのものだろう[17]。だが，ゾンバルトのこの議論には，ルカーチの物象化論（1923年の『歴史と階級意識』）やH. マルクーゼによる初期マルクスの疎外論研究（1932年の「経済学＝哲学手稿の解釈」）など，同時代の西欧マルクス主義が抱いていた問題意識との類似性も指摘できるのではないだろうか。だが（先に見たシュペングラーもそうであったように）ゾンバルトは，経済時代の終焉を目指すにあたって，マルクス主義（プロレタリア社会主義）を拒否することになる。では次に，このことについて見てみよう。

③　プロレタリア社会主義批判

まず最初に，次の点を注意しておきたい。ゾンバルトは，「マルクス主義的社会主義の枢軸」が「プロレタリア主義」にあると考え (Sombart 1934=1982 : 103)，マルクス主義とプロレタリア社会主義という二つの概念を同義的に扱っている（厳密には，前者を後者の最たる例と見なしている）。したがって，ゾンバルトがプロレタリア社会主義という際には，マルクス主義のことを基本的に指すと考えて差し支えない。

さて，ゾンバルトがプロレタリア社会主義としてのマルクス主義を問題視す

るのも，その理由は端的に次の点にある。つまり，「プロレタリア社会主義が経済時代の特徴を有し，この時代の嫡出の子である」（Sombart 1934=1982: 102）という点である。

ゾンバルトによると，「大衆の生活価値を中心とする世界観」に根ざしたプロレタリア社会主義は，「個々人の最も広汎な幸福状態の招来」を希求する。だが「この希望状態の基礎は，つねに十分な物的財貨を具えて生活することに他ならない」。ゆえに「『富』の増大」というこの理念の下にあるプロレタリア社会主義とは，「完全に経済時代を支配する観念の世界のなかにあ」り，「ブルジョア文化の価値以外のどんな価値も知らない」（Sombart 1934=1982 : 104-105）。だから，「プロレタリア思想家」たちが「未来の社会のために要求するのは，近代文明の本質の除去ではなくして，単なるその形式の排除である」。つまり，「資本主義的，私経済的」経済組織に代えて，共産主義的経済組織を置こうとするのだが，そこで目指されるのはまたしても，「労働生産力の向上」ということにある（Sombart 1934=1982 : 109-111）。

このようにゾンバルトは，プロレタリア社会主義としてのマルクス主義の内実も結局のところ，資本主義同様，経済的利益のさらなる追求（プロレタリア階級の経済的救済）でしかなく，したがってそれもまた，経済時代における経済的価値の支配という事態に組み込まれたままだと見る。そこでゾンバルトの批判の矛先は，（前述のシュペングラーと同様に）マルクス主義の唯物史観（経済史観）に向けられることにもなる。ゾンバルトによると，「経済を唯一の実在とし，その他すべての人間性を単なる経済の函数にすぎぬとする唯物史観，より正しくは経済史観は，過去の一世紀半〔経済時代〕に，そしてただこの期間においてのみ正しかった」にすぎない[108]（Sombart 1934=1982 : 2）。つまり，ゾンバルトは，次のように考えた。マルクスの唯物史観とは，経済時代の枠組み内でしか有効性を持っていない。しかも実のところ，それそのものが，経済時代の一つの産物である。したがって，それをもってしては，経済時代からの脱却への道を示しえようはずもない。

ところで，このことに関連して，ゾンバルトは，「マルクス歴史理論」が「社会的自然主義，『唯物論的』（経済主義的）歴史観，進化主義」（Sombart 1934=1982 : 139）だと指摘した上で，次のように述べている。

人類の歴史が自然現象の一部分をなし，「自然法則」に支配されているということは，たしかに経済的事実ではない。経験は，……人間が自由な意志をなしうること，人間が十分に意識しながら「社会的生産関係」のなかに入り込んでゆくことを教える。経験はまた，決してつねに経済的利害のみが歴史における優位を有せず，多くの他の宗教的，政治的利害が優位を占めていたことを教える。しかるにマルクスは，あらゆる経験に反して，……他ならぬ経済時代の特殊性を以て，人類の歴史に普遍的な内容と解釈し改めたのである。人間社会が自然現象の如き構成をもち，そのなかを人間の意志から独立した一定の傾向が貫徹し，そのなかでは経済的利害が他のすべてのものを支配する，――これらすべてのことは資本主義時代には広く正当と考えられる事実であった。ところがマルクスによれば，それが人間の歴史全体の特徴であるというのである。何という大きな，不幸な謬論であろう。(Sombart 1934=1982 : 139-140)

マルクスの唯物史観では「自主的に決定する力としての自由意志」(Sombart 1934=1982 : 121) が歴史から排除されるのだが，これは「人間精神の格下げ」(Sombart 1934=1982 : 115) を意味するとも，ゾンバルトはいう。そこで指摘できるのは，次の点である。つまりは，前述したように，近代資本主義下での人間疎外（ルカーチでいうところの物象化）をめぐっての危機意識については，ゾンバルトと同時代の西欧マルク主義との間には類似性を指摘できたのだが，今，見たものも含め，『ドイツ社会主義』全般におけるゾンバルトのマルクス観には，西欧マルクス主義におけるような初期マルクス的像[10]が見て取れないという点である。したがって，ゾンバルトがマルクス主義に対する批判を展開する際に彼の念頭にあったのは，（前述したシュペングラーと同様に）基本的には同時代の社会民主主義（その後期マルクス・エンゲルス的像）だったというべきなのかもしれない。

ただし，ここで一つ注意すべきことがある。それは，ゾンバルトの『ドイツ社会主義』が提出されたのは，ナチズムがすでに政権を掌握した後のことだったという点である（彼の同書が出版されたのは，ナチス政権が誕生した1933年の翌年にあたる1934年である)。つまりは，反ユダヤ主義ともからめつつ反マルクス主義的姿勢をあらわとしていた当時のナチス政権下では，例えば初期

マルクス的像を提示することなどをつうじて，マルクス主義を何らかの形で積極的に評価するような姿勢を示すことは，当時のゾンバルトにはもはや許されなかったという事情も，もしかしてあったのかもしれない[20]。

④　ドイツ社会主義とは？

ここまで見てきたように，ゾンバルトは，近代資本主義社会（経済時代）における経済的価値の支配状況に対して，歴史的危機意識を抱いていた。だが，プロレタリア社会主義としてのマルクス主義（同時代の社会民主主義にとどまらず，マルクス自身も含め[21]）の場合，それがなお経済時代に組み込まれたままのものだと見なす。そこでゾンバルトは，このマルクス主義に代わって，経済時代の克服を真に実現すべき社会主義として，ドイツ社会主義なるものを新たに提示することになる。

> 経済時代の荒野からドイツをつれ出すことを，ドイツ社会主義はみずからの担う任務と考える。ドイツ社会主義は経済時代の精神全体を否定する。そのかぎりにおいてそれは，現代の如何なる社会主義運動よりも，プロレタリア社会主義よりもさらに一層根底的である。けだしプロレタリア社会主義は，……根本においてはわれわれの住む文明時代〔経済時代〕の諸価値を肯定するものであって，ただこの時代の「恩恵」がすべての人間に，最下層の人々にも分けられることを意味しているだけだからである。それは符号のちがった資本主義にすぎない。だが，ドイツ社会主義は反資本主義である。（Sombart 1934=1982 : 200）

では，ゾンバルトがこのドイツ社会主義を具体的にはいかなるものとして提示したのかを，以下において見ていこう。経済時代を克服すべきドイツ社会主義において中核的役割を担うことになるとゾンバルトが考えているのは，（ここでもシュペングラーと同様）政治的なもの（政治権力の担い手）としての国家である。

> 社会主義の理念は最も緊密に国家の理念と結合している。社会主義の活動の場を国際的あるいは超国家的領域に移すことは，この理念からの完全な離

脱を意味するであろう。……社会主義はただ国家のうちにおいてのみ可能であり，また他方では，組織固く力強き単一の国家は，社会主義の基礎としてのみ可能なのである。(Sombart 1934=1982 : 219)

ゾンバルトが考えるに，経済的利害闘争をこの世から一掃し，資本主義的経済組織を破棄するためには，エゴイスティックな利害闘争から超越した存在として，利害闘争をつねに政治的に調停しうるような「権威国家」が必要である(Sombart 1934=1982 : 262, 286)。そこでゾンバルトは，計画経済と指導者原理[22]が，あるいは身分秩序[23]が，ドイツ社会主義下で重要になるとも考えている。

ところで，この権威主義的な国家観を披露する際，ゾンバルトが準拠しているのは，ヘーゲルの国家概念である[24]。ゾンバルトはさらに，ヘーゲルから次のことも学ばなければならないという。つまり，「われわれの特殊の利益がただ国家においてのみみたされること，『私の特殊的目的が普遍的目的と一致しなければならない』こと」(Sombart 1934=1982: 292) である。このことについて，ゾンバルトは，さらに詳しくは，次のように語る。

個人と国家の内的関係が何によって生ずるかということは，それ自身一つの問題である。それはヘーゲルが『主観的〔主体的〕実体性』の問題と名づけたところのものである。……国家に対する態度の決定……を個人が意識的に行なう場合には，われわれは彼が全く新しい形で現れることを思い知らねばならない。彼はもはや住民ではない。公民ではない。同胞ではない。彼はPerson（人格）である。しかしこの人格は，単なる経験的個人ではなくて，形而上学的本質〔である。〕……したがって，ただ神のみが責任をもつ極めて人格的な決定にあっては，個人は国家をその意識のうちにうけとる。この決定に対しては，どんな外的な力も，国家すらも，何らの影響も与えない。けだしこの決定は，形而上学的深みから出てくるからである。個人が自分の全力をこめて行なうこの決定こそ，自由の概念である。……〔イギリス的・フランス的なものとは異なり〕ドイツ的な自由の概念は絶対自由の概念である……。われわれの中心概念たる義務の概念は，この自由の概念に根ざしている。(Sombart 1934=1982 : 289-290)

つまり，ドイツ社会主義が究極的に体現すべきは，ヘーゲル的な自由，すなわちヘーゲル弁証法的な主体と客体の同一化[25]ということにこそあると，ゾンバルトは考えていたわけである[26]。ゾンバルトはいう。「ドイツの国民社会秩序」は，「個人の意志からではなく，超個人的な理性に導かれる全体の意志から生ずる」[27]（Sombart 1934=1982: 282）。ということで，前述した近代資本主義（経済時代）に対する歴史的危機意識のみならず，この点にもまた，同時代の西欧マルクス主義，とりわけ，ヘーゲル同一性哲学が理論的中核をなしていたルカーチの『歴史と階級意識』との類似性を指摘できるのかもしれない。

⑤ 小　括

ゾンバルトは，マルクス主義的（社会民主主義的）立場から出発しつつも，やがてはそれと決別することになる。だが，その彼が晩年の『ドイツ社会主義』で示した近現代（経済時代）における経済的価値の支配状況に対する歴史的危機意識には，同時代の西欧マルクス主義との類似性が見て取れた。しかしゾンバルトは，この事態の克服を目指すにあたって，マルクス主義をその経済主義的性格ゆえにあくまで拒絶する。その際，注目すべきは，ゾンバルトのマルクス主義観には初期マルクス的像が見て取れない（基本的には，社会民主主義的なものが念頭に置かれていた）という点である。にもかかわらず，マルクス主義（プロレタリア社会主義）に代わって，経済時代からの解放を目指すべく提示されたドイツ社会主義とはつまるところ，政治的国家を媒介とした上で，ヘーゲル弁証法哲学でいうところの主体的実体性（ヘーゲル的自由）を具現化すべきものであった。つまりは，この点にも結局，同時代の西欧マルクス主義，とくにルカーチの『歴史と階級意識』とのある種の類似性を指摘できるというわけである。

4　まとめ

シュペングラーとゾンバルトには，近代資本主義社会における物象化的事態に対する危機意識をめぐって，同時代の西欧マルクス主義との類似性が指摘できた。このことが少なからず物語っているのは，（本稿冒頭でもふれたように）次のことにあるのではないかと，筆者は考える。つまり，第一次大戦の敗北と

ともに未曾有の社会危機を目の当たりとする中，戦間期ドイツの知識人たちの中に，従来の左右のイデオロギー的枠組みでは必ずしもおしはかることのできないような問題意識の共有が見られたのではないかということである[28]。

とはいえシュペングラーとゾンバルトは，マルクス主義に対するにあたって，その経済主義的な唯物史観（経済史観），それに革命の主体が階級としてのプロレタリアートに措定されていることを問題視する。そこで両人は，（同時代の社会民主主義にとどまらず，マルクス自身も含む形で）マルクス主義を拒絶し，それと対比する形で自らの社会主義構想を描くことになる。

ただし，（初期マルクス的像がいまだ一般的に知られていなかった1919年初出のシュペングラーの『プロイセン主義と社会主義』はともかくとしても）すでにナチス期に入ってから提出されたゾンバルトの『ドイツ社会主義』の場合，ナチス政権の監視下でマルクス（初期マルクス的像）をなんらかの形で評価するような言説をとることができなかったという可能性もある。しかも興味深いことに，ゾンバルトは，近代資本主義（経済時代）の克服を志すにあたって，主体的実体性というヘーゲル弁証法的概念に注目を促している。このことは，シュペングラーも含めた戦間期ドイツの保守革命論と西欧マルクス主義（とくにルカーチの『歴史と階級意識』）との関係を考えるにあたっても，一つの重要な示唆となるのかもしれない[29]。

〔参考文献〕

Boltz, N., 1989, *Auszug aus der entzauberten Welt. Philosophischer Extremismus zwischen den Weltkriegen,* München: Wilhelm Fink Verlag.（＝1997年，山本尤・大貫敦子訳『批判理論の系譜学』法政大学出版局.）

Freyer, H., 1935, "Gegenwartsaufgaben der deutschen Soziologie," *Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft,* 95.

Herf, J., 1984, *Reactionary Modernism.Technology, culture, and politics in Weimar and the Third Reich,* New York : Cambridge University Press.（＝1991年，中村幹雄・谷口健治・姫岡とし子訳『保守革命とモダニズム - ワイマール・第三帝国のテクノロジー・文化・政治』岩波書店.）

Laquer, W.Z., 1974, *Weimar. A cultural History 1918-1933,* London: Weidenfeld & Nicolson.（＝1980年，脇圭平・八田恭昌・初宿正典訳『ワイマル文化

を生きた人々』ミネルヴァ書房.）

Lukacs, G., 1923, *Geschichte und Klassenbewußtsein. Studien über marxistische Dialektik,* Berlin: Malik Verlag. （＝1991 年，城塚登・古田光訳『歴史と階級意識 - マルクス主義弁証法の研究』白水社.）

Marcuse, H., 1932, "Neue Quellen zur Grundlegung des historischen Materialismus. Interpretation der neuveröffentlichten Manuskripte von Marx," *Die Gesellschaft,* 2.（＝1968 年，良知力・池田優三訳「経済学＝哲学手稿の解釈」『初期マルクス研究―『経済学＝哲学手稿』における疎外論』未来社.）

Sieferle, R.P., 1995, *Die Konservative Revolution. Fünf biographische Skizzen (Paul Lensch, Wener Sombart, Oswald Spengler, Ernst Junger, Hans Freyer),* Frankfrut am Main: S. Fischer Verlag.

Sombart, W., 1934, *Deutscher Sozialismus,* Charlottenburg: Buchholz & Weisswange.（＝1982 年，難波田春夫訳『難波田春夫著作集 10 - ゾンバルト・ドイツ社会主義』早稲田大学出版会.）

Sontheimer, K., 1968, *Antidemokratisches Denken in der Weimarer Republik. Die politischen Ideen des deutschen Nationalismus zwischen* 1918 und 1933, München: Nymphenburger Verlagshandlung. （＝1976 年，河島幸夫・脇圭平訳『ワイマール共和国の政治思想 - ドイツ・ナショナリズムの反民主主義思想』ミネルヴァ書房.）

Spengler, O., 1922, *Der Untergang des Abendlandes. Umrisse einer Morphologie der Weltgeschichte,* Bd. 2, München : C.H. Beck. （＝2001 年，村松正俊訳『西洋の没落 - 第二巻』五月書房.）

―(1919)1933, "Preußentum und Sozialismus," *Oswald Spengler. Politische Schriften,* München : C.H. Beck. （＝1992 年，桑原秀光訳「プロイセン主義と社会主義」『シュペングラー政治論集』不知火書房.）

八田恭昌，1986 年，『ヒトラーを生んだ国』新潮社。

柚木寛幸，2003a 年，「フライヤーにとっての社会学とルカーチにとってのマルクス主義」『一橋論叢』129 巻，2 号。

―2003b 年，「フライヤーにとっての民族革命とルカーチにとってのプロレタリアート革命」『社会学史研究』25 号。

―2003c 年，「倫理と科学のはざまで - フライヤー社会学とルカーチ・マルク

ス主義の類似性をめぐる一考察」『一橋論叢』130巻2号。

－2004年，「1930年代のホルクハイマーの批判理論的要請－ヘーゲル弁証法的パースペクティブの受容の仕方をめぐってのルカーチ・マルクス主義，フライヤー社会学との比較」『一橋論叢』132巻2号。

---

(1) この点には，ドイツの旧来型の保守主義に対する保守革命論の違いも指摘できる。旧来型の保守主義者たちにおいてもたしかに，資本主義に対する嫌悪は見られた。しかし結局のところ彼らは，自らの既得権益の維持に眼目がおかれがちだったのみならず，ロシア革命やドイツ革命を目の当たりとして，共産主義革命への恐怖に恐れおののいてもいた。そこで彼らの中に，現行の資本主義体制の根本的な変革を積極的に唱えるものは少なかった。

(2) ただしゾントハイマーは，青年ナショナリズムの保守主義的（国家主義的）側面ゆえに，その国民的社会主義にマルクス主義との次のような違いも指摘している。

> ワイマール期のドイツ・ナショナリズムにおける社会主義的潮流は，……すべての市民的なものへの軽蔑とともに，資本主義への激しい拒絶反応によって特徴づけられる。しかしこの反資本主義なるものの中心は，資本家による労働者の搾取云々といったマルクス主義的スローガンではなく，たとえば民族のための経済としての国民経済理念とか，全世界をおおう資本主義経済機構からの解放としての自給自足の理念のような，ナショナルなカテゴリーであった。がしかし，こうした国民的社会主義の思想も結局最後には一種の計画経済に，とりわけ経済の国家への従属に導くものであった。(Sontheimer 1968=1976 : 283)

(3) J. ハーフによると，シュペングラーのこの議論に見られる「手段と目的の逆転，歴史に対する人間の統制力の消失というテーマは，ヘーゲルが歴史の狡智という概念を作り上げて以来，ドイツの社会思想におけるありきたりのテーマになって」きたという。その上でハーフは，シュペングラーのこうした議論には，ルカーチの物象化論やM. ヴェーバーの合理化テーゼ（脱魔術化概念），もしくはG. ジンメルでいう文化の悲劇との類似性があることを指摘している（Herf 1984=1991 : 101, 103)。

(4) こうしたイギリス自由主義の一つの産物だとシュペングラーが見なしているのは，議会主義である。イギリス流の議会とは経済的利害をめぐっての諸党派（私的諸個人）間の「激しい一騎打ち」の場だ（Spengler (1919) 1933=1992: 82）と，シュペングラーはいう。そこで彼は，「ドイツにおける議会主義は無意味ないしは背信というほかあるまい」(Spengler (1919) 1933=1992 : 60) と述べることになる。

(5) シュペングラーは，マルクスの唯物史観を批判する際，マルクスがヘーゲルの弟子であることにふれた上で，マルクスと対比しつつ，ヘーゲル（彼の国家主義的側面）を次のように評価している。

> マルクスが親英家として経済をかれの機械的・ダーウィン的な「進歩」の中心点に据えるのと同様に，ヘーゲルは「プロイセン人」としての精神的な親和力から国家を確信をもってかれの十分に深く，ほとんどゲーテ流に理解された発展の中心点に据える。国家が歴史の形成者であるとヘーゲルはいう。即ち政治は歴史なのである。(Spengler (1919) 1933=1992: 84)

(6) シュペングラーは，第一次大戦末期に勃発したドイツ革命も結局は，「党議員団控え室で行なわ

れた革命であったにすぎな」かった（Spengler（1919）1933=1992: 14）という。これは，ヴァイマル共和国が成立するにあたって主導権を握った左派中道の社会民主党を念頭に置いた批判だろう。だが他方でシュペングラーは，R. ルクセンブルクらに導かれ1919年のその蜂起がヴァイマル政府に鎮圧されることになる極左派のスパルタクス団については，好意を示している（Spengler（1919）1933=1992: 17）。また，19世紀後半に体制側からの弾圧を受けながらもドイツ社会民主党（あるいは，その前身である社会民主労働者党）の結党にこぎつけたA. ベーベルについても，ドイツ的な全体主義（組織全体へ個々の構成員が奉仕すべきこと）を理解しえた人物として，シュペングラーは幾度も讃えている（Spengler（1919）1933=1992: 39, 43, 44, 52, 81, 87）。

なおロシア・ボルシェヴィズムに関しては，シュペングラーは次のように批判している。ボルシェヴィズムとは，ドストエフスキーやトルストイにも見られる「西欧諸国に対するあの激しい，底知れぬロシア人の，かれらの体内に流れる憎悪」に起因するものである。「ロシアの『インテリ連中』」は，「西欧文明を粉砕しようとしている」のだが，「これが東方諸国のニヒリズムの意味である」。そもそも「真のロシア人は誰でもが農民であり」，労働者ではなく，そこには「農村問題しか存在しない」。だから，「模倣された大衆のイデオロギー」たるボルシェヴィズムは，ロシア人の関心をひき起こすことはなく，「意味のない錯乱した頭脳から生まれた一つの流行」にすぎない（Spengler（1919）1933=1992 : 98-99）。

(7) シュペングラーのマルクス主義批判が展開されている『プロイセン主義と社会主義』は，1919年の彼の著作である。だが周知のように，K. コルシュの『マルクス主義と哲学』とルカーチの『歴史と階級意識』が1923年に出版されるとともに西欧マルクス主義が登場したことや，また，『ドイツ・イデオロギー』や『経済学・哲学手稿』などマルクスの初期の手稿が1920年代以降に発掘されていったこともあって，マルクスの全体像の再解釈がなされてきた。そうした中で，シュペングラーがマルクス自身に指摘している経済主義的側面が過度のものであることは明らかにされてきたといえよう。

(8) そこでシュペングラーは，君主政体（「君主社会主義制度」）を重要視してもいる（Spengler（1919）1933=1992 : 95）。その際，彼が理想的君主像（社会主義者像）として思い描いていたのは，「権力への意志」をもってして「個人の幸福でなく全体の幸福」を勝ち取ろうとしたというフリードリヒ・ヴィルヘルム一世である（Spengler（1919）1933=1992 : 48）。ただしシュペングラーは，君主もまた，プロイセン国家にあくまで従属した存在だとも釘をさす（Spengler（1919）1933=1992 : 91）。だからシュペングラーは，第一次大戦でのドイツの敗北とともにオランダに亡命したヴィルヘルム二世に対しては，不快感をあらわにしている（Spengler（1919）1933=1992 : 87）。

(9) シュペングラーによると，「真のドイツ人であるならば，誰もが労働者である」（Spengler（1919）1933=1992 : 17）。だがその場合，労働の本質とは，イギリス自由主義（もしくはマルクス主義）におけるように個々人が富裕になるための手段では決してなく，国家全体の発展のために個々人に課せられた義務である（Spengler（1919）1933=1992 : 78）。そこで労働の対価としての賃金についても，国家の統制の下，「特定の職業階級のためではなく，国民全体の利益のために計画的に段階づけられる」（Spengler（1919）1933=1992 : 82）と，シュペングラーはする。

だがこのことは裏を返すと，彼がプロイセン社会主義下での賃金格差をむしろ正統なものとして是認しているということになる。なお，ゾントハイマーは，シュペングラーの『プロイセン主義とドイツ主義』では「反資本主義の要素は，完全といえないまでもほとんど消し去られていた」（Sontheimer 1968=1976: 286）と指摘した上で，その歴史的背景について，次のように論じている。

もちろんこの小冊子〔『プロイセン主義とドイツ主義』〕を書いた当時〔1919年〕のシュペングラーは，《資本主義に対するドイツ人の反感》（シュトラッサー）にとって重大な意味をもち，青年ナショナリストたちの反資本主義的心情を大きく促進したあの大インフレーションと世界恐

慌を，まだ体験していなかった。古くからの社会主義センターを別として，反資本主義的心情の波が，ワイマール・ドイツの小市民層と多くの知識人を捉えたのは比較的遅く，1920年代末期のことである。その時はじめて国民的社会主義の理念は決定的な反資本主義のアクセントを帯びることになった。(Sontheimer 1968=1976: 286)

(10) ここでゾントハイマーが主に念頭に入れているのは，シュペングラーとメラー・ファン・デン・ブルックの社会主義観である。

(11) ちなみに，シュペングラーの晩年には，ドイツでナチス党が政権を掌握することになるのだが，シュペングラーとこの党との関係は不仲なものだったといわれている。シュペングラーの「高踏的姿勢からすれば，スローガンや旗やマーチの鳴物入りでくりひろげられるナチスの運動は下劣な大衆運動以外のなにものでもなかった」(八田 1986:184)。またシュペングラーとしてはそもそも，ナチズムにおける「アーリア人の血に関する理論と民族主義的神話だけは何としても容認するわけにいかなかった」。というのも，「かれにとってそれらはローマン主義的空想であるだけでなく，19世紀におけるダーヴィニズム的実証主義の遺物として，それこそ唾棄すべきものであったからである」。ナチス党の方も，「ワイマルとそれが擁護する一切のものを糾弾しつづけるシュペングラーの功績を認めながらも，その決定論と悲観論－ナチからすればまさに心得ちがいな見解－の故に，かれを攻撃した」(Laqueur 1974=1980:113-114)。シュペングラーは1936年に死去するのだが，晩年の彼は結局，人類古代史の研究に専念するようになる。つまりは，彼もまた，ナチス期においていわゆる「国内亡命」を強いられた保守革命論者（例えばC. シュミット，H. フライヤー，M. ハイデガー）の一例であったといえよう（八田 1986:186)。

(12) ビスマルク政権下で1878年に制定された社会主義者鎮圧法が1890年に廃止され，ドイツ社会民主党が誕生した際，若きゾンバルトもまた，この党に共鳴した知識人の一人であった。そこで彼は，当時まだ新鮮でドグマティック化していないと思われたマルクス主義理論の研究に取り組むことになる。社会民主党（また，当時なお存命中だったエンゲルス）の方も，党の将来有望な理論家として，ゾンバルトに期待を寄せていた（Sieferle 1995:75)。

(13) R. P. ジフェールレによると，20世紀の初め以降，「ゾンバルトは，進化論的なマルクス主義への支持を取り下げていった」。つまりゾンバルトは，「プロレタリアートがブルジョア化していく」のを目の当たりにしていく中，プロレタリアートを主体とした革命への期待を失い，「新しい革命的主体としてのドイツ民族の可能性が模索されるようになった」。そしてジフェールレは，ゾンバルトのこの転身を加速させたのが，資本主義の克服と民族共同体（国民的社会主義）の実現とを期待させた第一次大戦（1914年のその開戦）だったとしている（Sieferle 1995:91)。

(14) ゾンバルト晩年の著書『ドイツ社会主義』は，その出版年がナチス政権誕生の翌年にあたる1934年だったこともあって，ナチズム運動との関係が問題視されてきた書でもある。同書では，その運動に対する多少なりともアンビバレントな態度が留保されつつも，基本的にはその運動を彼なりの社会主義的見地（ナチス左派に近い立場）より支援するような言説が随所に見て取れる。なお，ナチズムの一つのイデオロギー的根幹たる反ユダヤ主義（人種主義）については基本的に否定されている。

(15) その際，ゾンバルトは，次のように付言している。「私〔ゾンバルト〕は滅びゆきつつあるこの時期を，『資本主義時代』とは呼ばないことにする」。というのも，「この時期の特質を規定するものは，もちろん資本主義的と呼ばれる経済様式であるに相違ないが，この時期にかかる特質を与えている根本のものは，経済的利害そのものの優位であるからである」(Sombart 1934=1982:2)。

(16) 経済時代においてこれらの過程が進行した一つの結果として，ゾンバルトは，伝統的な共同体（ゲマインシャフト）の消失とともに，その結果としての個人の孤立化（「ハイデッガー的不安」）を指摘している（Sombart 1934=1982:40, 43)。またゾンバルトは，経済時代のそのほかの帰結と

して，近代科学的認識の個別化・実証主義化（認識対象の数量化）に対しても批判している（Sombart 1934=1982 : 37-38)。

(17) ゾンバルトによると，経済時代において「人間に加えられた最もひどい打撃は，神の信仰の破壊であり，したがって現世的存在が一切の超越的関係から解き放たれたことである」（Sombart 1934=1982: 39)。このようにゾンバルトは，M. ヴェーバーでいうところの脱魔術化について語っている。だがヴェーバーの場合，近代における脱魔術化という事態をポジティブにとらえようという姿勢も見られた（その際，ヴェーバーが，この事態をただオプティミスティックに歓迎したわけではまったくないことはいうまでもない)。それに対してゾンバルトの場合，明らかにネガティブにのみとらえている。こうした違いゆえに，ヴェーバー的な合理化概念に対しても，ゾンバルトは不満をあらわすことになったのではないだろうか。

(18) ゾンバルトは，唯物史観（経済史観）によって立つマルクス主義的な階級闘争史観をめぐっても，「経済的利益が社会集団の構成にとって決定的であるのは，ただ経済時代においてのみのことである」にもかかわらず，「カール・マルクスの根本的な誤謬は，如何なる時代においても，つねに階級と階級闘争とが存していたはずであるとする点にある」（Sombart 1934=1982: 29）として批判している。

(19) 例えばH. マルクーゼは，ゾンバルトの『ドイツ社会主義』が出版される二年前に発表した論文「『経済学＝哲学手稿』の解釈」において，次のような初期マルクス的像（疎外論）を提示している。

> 資本主義をとおして問題になっているのは，単なる経済的な事実や対象ばかりでなく，人間の全「実存」であり，「人間的現実」であるということこそ，マルクスにとって，プロレタリア革命の決定的な論拠である。というのも，それは単なる部分的な変革や「進化」をすべて無条件に排除する全面的でラディカルな革命にほかならないのであるから。……マルクス理論がもっている哲学的内容をおしのけたり，おずおずとかくしだてしようとするこころみはすべて，この理論の本源的な歴史的基盤をまったく誤認している証拠である。そのような誤認は哲学，経済学および革命的実践が本質的に分離していることから発しており，しかもその分離こそ，まさにマルクスが論難した物化の産物であり，マルクスがかれの批判をはじめるにあたってすでに克服ずみのものであった。（Marcuse 1932=1968 : 19-20）

(20) このことは例えば，戦間期ドイツの保守革命論の代表的論者の一人であり，社会学者でもあるH. フライヤーが，ナチス治下の1935年に提出した論文「ドイツ社会学の現代の課題（Freyer 1935）にも如実にあらわれている。この論文で彼はまず，ヘーゲル弁証法哲学（同一性哲学）の観念論性が実在論化され，市民社会の危機の克服という使命が自覚されることによって，19世紀中葉以降にドイツ社会学が現実科学として成立したというフライヤー自身のナチス期以前の主張をあらためて確認している。だがその際，ヴァイマル末期の『現実科学としての社会学』（1930年）や『社会学入門』（1931年）では，社会学のこの出発点が，L. v. シュタイン社会学とともに，それ以上にマルクス社会理論にこそ求められるべきことが主張されていた（柚木　2003a: 85-87)。だがナチス治下で提出された「ドイツ社会学の現代の課題」では，ドイツ社会学の創始者として，シュタイン（あるいはW. H. リール，R. v. モール，H. v. トライチュケ）の名は挙げられるも，マルクスの功績についてはいっさいふれられていない。ちなみに，マルクス主義一般の唯物史観（経済史観）に対する批判はなされている。

(21) ちなみにゾンバルトは，ボルシェヴィズムについても，「体制を根本から変革した国，ロシア」も，文化の点では，経済時代の精神に拘束されたままであるとして批判している（Sombart 1934=1982 : 51, 142)。

(22) ゾンバルトによると，「自由主義経済とは原則上自由ないわゆる『競争経済』であり，社会主義経済とは原則上統制せられたいわゆる『計画経済』」である（Sombart 1934=1982：78)。そして「他ならぬ『指導者原理』こそが，必然的に計画経済，すなわち社会主義へとみちびく」。「『指導者原理』とは，多数人の集まりがその行動において一指導者の命令に規定されること（その反対は多数決である)，および指導者がその機能を彼に服従するものの意志からではなく，さらにその上位にある指導者〔神〕の命令から演繹していることを意味する」(Sombart 1934=1982：378-379)。

(23) ゾンバルトによると，「身分的な秩序においては，私的利益は克服され，国家の全体のなかに編み込まれなければならない」。そしてこのことをつうじて，「政治の優位」を体現させなければならない。だから，「身分という概念はつねに政治的意味に把握されねばならない」(Sombart 1934=1982: 276-277)。なおゾンバルトは，ドイツ社会主義は「思想上プロレタリア文化とは何の関わりもない」として，事実上，階級格差を容認するような発言も行なっている（Sombart 1934=1982：334)。

(24) もしくは，C. シュミットの全体国家論や（敵・味方関係としての）政治概念である（Sombart 1934=1982: 213, 262)。

(25) こうしたヘーゲル的自由（ゲマインシャフト）が体現されていた時代が遠い過去にあったことを，ゾンバルトは，次のように示唆している。

> ドイツ社会主義を防衛するものに一つの理想像が浮かび上るとするならば，それは人類の偉大な創成の時期のそれである。その時には，統一的精神が個々人を意味ある全体に統合し，すべてのものが自己生活を充実させることによって，共同体への奉仕をなしとげたのであった（Sombart 1934=1982：202)。

(26) ゾンバルトは，ドイツ社会主義にとって身分秩序（身分構成）が重要である理由について，「身分構成が，個人の利益と全体の利益の均衡を何よりもまず保証する」(Sombart 1934=1982: 279) ものだからだとする。その際，ヘーゲル弁証法哲学（同一性哲学）からの影響を多分に感じさせるような形で，次のように述べてもいる。

> 身分構成は一方では個人の人格の要求をも参酌している。個人の人格は最高度の完成と発展をみなければならないが，しかしこのことが可能となるのは，個人が全体に仕える一部分として全体のなかに編み込まれるとき（ヴィルヘルム・マイステルの『修行時代』に対する『遍歴時代』の立場）のみであり，そしてまた個人が存在し活動する場所が，そこでのみ個人の特質を完全に発揮しうるように選ばれるときだけである。……他方では，全体は，その成員の個性化によって力と強さを得る。個人がちがっていればいるだけ，全体の秩序のなかで自分のみに限られている地位に立っていればいるだけ，平等思想とは逆に，一体の思想は最高度に高められる。けだし全体もまた，その部分の個性化には欠くことのできないものだからである。(Sombart 1934=1982：279-280)

(27) ゾンバルトが，ドイツ社会主義下での「国民経済の最良の担い手」として，プロレタリア階級に代えて期待を向けたのは，「農民階級と手工業者階級」であった。その際，ゾンバルトは，農民階級と手工業階級（中産階級）を，労働を媒介して主体と客体の同一性を体感しうるような存在として描き出している（Sombart 1934=1982:366)。

(28) N. ボルツによると，「ワイマール時代が非常に知的刺激に富む時代であるのは，なによりも右翼・左翼という周知の政治的区別がまったく使いものにならないという点にある」(Bolz 1989=1997:ix)。なおボルツは，ヴァイマル・ドイツのこのような思潮状況を示す一例として，C.

シュミットとW. ベンヤミンの関係に注目し，考察している。

(29) こうした観点より，筆者は以前，保守革命論者フライヤーと西欧マルクス主義者ルカーチ，M ホルクハイマーとの比較考察を行なっている（柚木 2003a, 2003b, 2003c, 2004)。

＊引用文中の〔　〕は，筆者による補足である。